

てんのあみじましくれのこたつ

天網島時雨炬燵

〔解説〕享保五年の秋、網島の大長寺であつた心中事件をもとにした近松門左衛門の世話物代表作「心中天網島」とその後、近松半二らによつて改作された「心中紙屋治兵衛」をもとに、菅専助らによつて再編された作品です。これ以外にも種々の改作が作られたようです。「心中紙屋治兵衛」の上の巻が今日の通称「河庄」で、「増補紙屋治兵衛」が通称「紙治」と言われていますが、これは作者不詳で内容も近松の原作とは異なっているようです。

〔あらすじ〕紙屋治兵衛は妻子ある身ながらも、曾根崎新地の紀の国屋の遊女小春と恋仲になります。心配した兄の粉屋孫右衛門は、侍姿に扮して小春に近づき、二人の仲を裂こうとします。また治兵衛の女房おさんも、小春に治兵衛と別れてくれるように頼み、承知した小春は治兵衛に心にもない愛想づかしをするのでした。

〈紙屋内の段〉小春と別れる、という誓詞を書かされた治兵衛は周囲の心配をよそにすっかり氣力をなくして炬燵で横になり、口惜しさのあまり涙を流します。それを見たおさんは、治兵衛の未練がましい態度に皮肉を言います。ところがそこへ小春が意に添わぬ相手に身請けされるといふ話が伝わり、おさんは小春が死ぬ気であると察して狼狽えます。そして治兵衛に、自分が小春に「別れてくれ」と頼んだのだと打ち明けます。小春を死なせてはならないと思つたおさんは、五十両の身請けの金を治兵衛に渡し、着物を質にいれようとしたところへ、おさんの父、五左衛門が現れ、おさんを無理矢理連れ帰るのでした。

紙屋内の段

直ぐに仏なり

門送りさえそこ〜に、治兵衛は傍にあり合わす定木を枕うたた寝の、あたる炬燵の小春時

『まだ曾根崎を忘れずか』と、退ける蒲団の内さえも、涙にしめるその風情。おさんは呆れつくづく顔打守り〜、

「エ、あんまりじゃぞへ治兵衛さん。それほど名残りが惜しいなら、誓紙書かぬがよござんす。なぜにお前はそうように、私が憎うござんすえ」

「ア、コレコレそりやまあ何を言やるぞいの。子中までなした仲に」

「イエ〜、憎いそうなく〜。憎ましゃんすが嘘かいな。一昨年の十月、中の亥の子に炬燵明けた

祝儀とて、これこゝで枕並べてこの方は、女房の懐には鬼が住むか蛇が住むか。それほど心残りなら泣かしやんせ泣かしやんせ。その涙が蜷川へ流れたら小春が汲んで飲みやろうぞ。あんまりむごい治兵衛さん。なんぼお前に、どのような切ない義理があるとても、二人の子供は、お前なんともないかいな」と心の限り口説き立て恨み歎くぞ誠なる。

「オ、もつともじゃ謝った。悲しい涙は目より出で、無念んな涙は耳からなりとも出るならば、言はずと心見すべきに、同じ目より零るゝ涙。足かけ三年がその間、露ほども愠気せぬ、そなたに言うも恥ずかしながら、この間も曾根崎で、残らず聞いた小春めが不心中。今という今夢も覚め、思い切つてはいるけれど、アノ太兵衛めが、急に身請けをするとの噂。退いて十日も経たぬうち、請け出さるゝ義理知らず

の小春めがことは心残らねど、間屋中の交際にも、金の工面に尽きしゆえ、小春を退いたの何のとて、得知れぬ奴らが口の端に、かかるが無念な口惜しいとサ、思わず涙をこぼしたわいのう」

「エ、そんならほんまに小春さんは、お前に愛想尽かしを言うて、アノ太兵衛がところへ行く筈かえ」

「ハテきよときよとしいその声わいの」

「イ、エイナアそんなら小春さんは生きている気じやない、死なしやんす／＼わいな」

「アハ、／＼、はてさてなんぼ發明でも、さすがは町の女房じや。あの不心中者がなんの死のうぞ」

「イエ／＼そうじゃござんせぬ。小春さんに不中心は、芥子ほどもないけれど、いつぞやよりお前の素振り。何を言うてもうかうかと、もし悲しい目を見ようかと案じ過ごして小春さんへ『いとしいと思わ

んす治兵衛殿のためじゃほどに、思い切つてくださ

んせ』とかき口説いてやった文。引かれぬ義理と合

点して『親にも替えぬ恋なれど、想い切る』との嬉し

い返事。モこれほど真実な心で、なんの太兵衛のと

ころへ往かしやんしよ。請け出されたらそのままに、

死ぬる覚悟に違ひはない、小春さんを殺してはこの

さんが義理立たず、どうぞ命が助けたい。思案して

くださんせ。マひよんなことどうしよう」

と、初めて明かす女房の誠。

「ム、そんならアノ不心中と見せたのは、そなたの

頼みか」

「アイナア」

「ム、すりややつぱりおれを大切から。ハア、そう

とは知らず今までも、義理知らずの畜生のと恨んだ

心が恥ずかしい」

「ア、コレそれ言う手間でこなさん往て、どうぞ殺さぬようにしてしんせてくださいなせ〜いな」

「ハテ小春が命助けるは百五十両。せめて半金なりとも手附けに渡し、取り止めるよりほかない。が、何を言うても金の工面に尽きたこの身」

「ノウ仰山な。それで済むなら易いこと」

と、立つて箆笥の小引き出し、明けて取り出さないまぜの、紐付く帛紗押し開き、差し出す一包み。治兵衛取り上げびっくりし、

「ヤ、コリヤこれ小判五十両。マどうしてそなたが」

「サアこの金の出所も、後で語れば知れること。この晦日に岩国の仕切り銀に才覚はしたれども、それは兄御と談合して、商いの尾は見せぬわいな、小春さんの方は急なこと。ソレ、その小判五十両と、残りはわしが」

とかい立つて、明けて取り出す染小袖。かねてこうとは白茶裏、黒羽二重も色替えぬ、淺紫の糸目結い疋田鹿の子も惜しげのう、子供の物もかい集め、内輪に見ても二十両、よもや貸さぬということはない物までもある顔に、夫の恥とわが義理を、一つに包む風呂敷のうちに情けぞ籠もりける。

「わしや子供は何着いでも、とかく男は世間が大事。身請けしてあの太兵衛めに、一分立ててくださんせ」
と言えど答えも涙声。

「オ、過分なぞや、忝ない。が、手附け渡して取り止め、請け出して困うておくか、またうちへ入れるにしてからが、マそなたは何と」

と言いさして打ちしをるれば、

「ア、これ何のいな何のいな。必ず案じてくださんすなえ。ハテモ子供の乳母か飯焚きか。面倒ながら

面倒ながら真実の妹、妹持ったと思うて」

と、言うも胸まで突つかくる、涙飲み込み飲み込んで、夫に立つる貞節は傍で見ると目もいじらしき。

「チエ、何にも言わぬコレ女房ども。モ、親の罰、天の罰、仏神の罰は当たらずとも、女房の罰が恐ろしい。赦してたま」

とばかりに伏して拝む手を

「ア、これ勿体ないくくわいなあ。ハテモ手足の爪を放しても、みな夫へのためじやもの。跡の間では詮ないこと、さあさあ早う」

と三五郎呼び出し渡す風呂敷懐へ、金押し入れて立出づる。

「治兵衛殿お宿にか」
と門口這入る五左衛門。

「オ、これはしたり舅殿。マようお出で」

も夫婦はうじく。三五郎が背負うたる、風呂敷見付けて、

「コリヤ阿呆め。その包みどこへ持って行く、ア、また質屋へうせるのか。こつちへおこせ」

と引ったくられ、びつくり拍子抜け参りの、宵に知れたる心地して、一間のうちへ逃げて行く。

「大方こうであろうと思うたわい。着類着そげを質にまげて、をやま狂いに仕上げるのじやな、をやま狂いに。コリヤヤイ女郎の誠とな、鬼瓦の笑い顔とはないものじやぞよ。サア手短におさんに隙やりや。女の子は母へつくが世間の大法。お末はさつきに祖母が連れて戻り、アコ、この誓紙をひけらかしておれに渡した。ア、えらいようでもどこぞが女。こんなで行くのじやないぞよ。サア誓紙の代わりに去り状書け。エ、あんだら臭い」

と引き裂き、治兵衛が顔へ打付けて、お上にどつさり大白なり。おさんは聞きかね、

「コレ父さん。ソリヤお前聞こえませぬ、わいな。

こちらのうちの身代の衰えたのもみなお前から起こったこと。ないもせぬ銀山にかゝったと言うて、三十両借り五十両借り、揚句にはその銀山が潰れたとやら、もとも子もないようにしてしまわしやんしたぞえ。男気な治兵衛殿、舅のことなり言い出せばこつちも恥と、証文も残らず戻し、済まさしやんしたその時はコレそのマア怖い顔に涙をこぼして、悦ばしやんしたことをお前よもや忘れはさしやんすまいがなお前。また主の悪所通いも、もとの起こりはござんから起こったこと。歴と仕分けて貰うた身代。『なにして金が減ったぞ』と、本家の不審が立った時、『ハイ舅殿に取られましたと、鼻毛らしゆう言わ

れもせず』と、口へ出して言いこそさっしやれね、その志を推量して、初手の間の茶屋通いは、世間に聞こえにでもさっしやることと、ほんにやれ、行かしやる度々にわしや、わしや後ろから押んではかりいたわいな。その大恩を打忘れ、阿呆じやのイヤたわけのと、仮初めにも勿体ないこらえてください。こちらの人。父さん去んでくださいせ」

と宥つ叱つゝ両方へ、わが身一つの切なさ辛さ思いやられて道理なる。

思いは同じ憂き思い、身のいい訳に紀の国屋、小春はここへ来かゝりて、ようすありげなうちの体。『逢うてはいかが』と用水の蔭に隠れて聞きいたる、とは知らずして治兵衛は手をつき、

「イヤモご立腹の段はごもつとも。が、おさんが申すはみな無駄ごと。私心に存せぬこと、このまゝ添

わせてください」

と、詫ぶれど聞かず

「イヤならぬわい。何にも言うこと聞くことないわい。おさん戻せばことは済む。しかし拵えおこせし

道具衣装、改めて封付けん」

と、立ち上がれば、おさんは驚き、

「ア、コレ父さん。衣装道具も揃うてある。改めるには及ばぬ」

と、駈けふさがれば突き飛ばし、ぐつと引き出し、

「コリヤどうじゃ」

と、一重二重引き出しの数もありだけ押入まで、底を叩いて五左衛門口あんぐりとあきいれ物、差すにも差されず詞さえ暫し、呆れていたりける。治兵衛とつくと心を定め、

「コレ舅殿。この五十両は女房おさんが着衣装、ド、

道具の代わり、不足にはあるうが持つてござれ」

「エ、オ、ウハ、、、そうはかい／＼やい、ハ、、、イヤまだどう言うても大身代じゃての、ハ、、、、

ガ、あのしだらを見るからは、いよいよ娘は連れて去ぬ。サアうせう」

と引き立つれば

「マアマア待つてくださんせ／＼いなア。モあゝ言い出しては聞かぬ父さん。わたしやマア帰ります。

言うまではないけれど、勘太郎がことを頼みますぞえ、朝飯前に忘れずと、ナソレ桑山の丸子／＼飲ましてくださんせエ」

「オ、氣遣いしやんな。思いもよらぬ今この時宜。とんと心も落ち着かねど、そんなら暫く別れていよ。舅殿も娘のこと、まんざらむづ／＼もさつしやるまい。

ツイまた戻りやるようになろぞいの」

「アイくくくナア、申し治兵衛さん。必ず短気の出ぬように」

「エ、小面倒な暇乞い。きりきり歩め」

と引立つる。声に目覚ます勘太郎。

「母様くくのう」

を聞き捨てに後に、見捨つる子を捨つる、藪に夫婦の二股竹永き、別れと出でて行く。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承ください。